



セキュリティ概要

Adobe Express エンタープライズ版

2026 年 1 月



Adobe Express エンタープライズ版の概要

Adobe Express エンタープライズ版は、大規模組織がブランドに準拠したコンテンツを大規模に作成できるよう設計された、中央管理型のプラットフォームであり、エンタープライズレベルのセキュリティ、ガバナンス、管理機能を備えています。ロックされたテンプレートを含むブランドキット、Adobe Stock アセットへのアクセス、共有型のエンタープライズストレージ、強力なリアルタイムコラボレーション機能などを備えた Adobe Express エンタープライズ版を使用すれば、ブランドコンプライアンスと企業のセキュリティ要件を維持しながら、効率的にコンテンツを作成できます。

Adobe Express エンタープライズ版のコンポーネント

Adobe Express エンタープライズ版のソリューションは、次のコンポーネントで構成されています。

- **オーサリングワークスペース** – ブランドに準拠したテンプレートを使用して、ドキュメント、画像、動画、web ページをデザインおよび編集するための直感的なツールを提供します。Express エンタープライズ版は、スマートレイアウト機能、クイックアクション、さらにテキスト、画像、動画の作成および編集を含む生成 AI 支援機能をサポートしています。
- **アセット管理** – Express ファイル、テンプレート、ブランド、ライブラリ、アップロードされたアセットなど、ユーザー所有コンテンツの検索、保存、管理を可能にします。また、Adobe Stock アセット、フォント、テンプレートなど、既存コンテンツの大規模ライブラリにもアクセスできます。さらに、[Adobe Experience Manager Assets](#)、[Creative Cloud エンタープライズ版](#)、[Microsoft SharePoint および OneDrive](#) との連携により、組織で既存のエンタープライズアセットを活用できます。
- **共有とコラボレーション** – ユーザーは他のユーザーを招待してコンテンツの共同作業をおこなうことができ、アクセスレベルを制御できます（ライブ共同編集、コメント、閲覧のみ、非同期のレビューおよび承認ワークフローなど）。またバージョン履歴を使えば、チームで変更のトラックや編集の復元ができ、ガバナンスの維持にも役立ちます。
- **書き出しと公開** – ユーザーは Adobe Express のコンテンツを PDF、画像、または動画形式に書き出すことができます。書き出されたアセットはユーザーのデバイスにダウンロードすることもできますし、管理コンソールの設定にもとづき、組織のポリシーに従って承認済みの保存先へ公開することも可能です。
- **PDF インポートエンジン** – PDF ファイルを Express で編集、保存できる形式に変換します。ユーザーが Adobe Acrobat または Acrobat Studio から Express に PDF ファイルを読み込むと、PDF インポートエンジンによって PDF が Express ファイルに変換されますが、元の PDF ファイルは Creative Cloud ストレージにそのまま保持されます。

Adobe Express エンタープライズ版へのアクセス

ユーザー認証

ユーザーが Adobe Express エンタープライズ版にアクセスできるようにするには、組織の Adobe 管理者が、Adobe Admin Console でそのユーザーを Express エンタープライズ版または Creative Cloud エンタープライズ版（組織が Creative Cloud ライセンスに Express を追加している場合）の製品プロファイルに追加する必要があります。詳しくは、[HelpX](#) を参照してください。

Adobe Express エンタープライズ版では、Adobe ID 管理サービス（IMS）を使用してユーザーの認証と権限管理をおこないます。Adobe IMS について詳しくは、[Adobe ID 管理サービスのセキュリティ概要](#)（英語）を参照してください。

生成 AI のアクセス制御

Adobe Firefly

管理者は、Adobe Admin Console で役割（ロール）と権限を使用して、Adobe Express 内での Adobe Firefly へのアクセスを管理できます。詳しくは、[HelpX](#) を参照してください。

「Firefly ユーザー」ロール（またはこの権限が有効になっているカスタムロール）が割り当てられているユーザーのみが、Firefly を利用した機能を使用できます。無効にすると、Adobe Express 内の Firefly による生成 AI 機能は自動的にオフになります。

アドビは、Adobe Firefly モデルのトレーニングにお客様のコンテンツを使用しません。

Azure OpenAI

Adobe Express エンタープライズ版のテキストベース機能に対して、Azure OpenAI の使用を無効にすることはできません。

アドビは、Azure OpenAI サービスのトレーニングや微調整のためにお客様のデータを使用することはありません。

データの暗号化

- **転送中** – すべてのデータは、HTTPS 経由での転送中に、TLS 1.2 以上を使用して暗号化されます。
- **保存時** – Express エンタープライズ版によって保存されるユーザー生成コンテンツは、AES 256 ビット暗号化により保存時に暗号化されます。

その他のエンタープライズ向けセキュリティ機能

Adobe Express エンタープライズ版は、Adobe Creative Cloud エンタープライズ版の一部として、同様のエンタープライズレベルのストレージおよびセキュリティオプションをサポートしています。これには、ロールベースのアクセス制御や、FIPS 140-2 認証済みのハードウェアセキュリティモジュール (HSM) によって保護された、顧客管理型の専用暗号化キーなど、高度なストレージ管理機能が含まれます。

すべての共有および編集アクティビティは、コンテンツログおよび監査証跡として記録され、Admin Console を通じて確認できます。お客様は、これらを自社の保持設定や承認ワークフローと組み合わせることで、ガバナンス要件に対応できます。

また、Admin Console および関連する ID プロバイダーを通じて、レビュー承認ワークフロー、データ保持ポリシー、ソーシャルメディア公開の制限、アセット所有権ルールなどを定義し、適用することもできます。

セキュリティアーキテクチャとデータフロー - コンテンツ作成

以下の手順は、ユーザーが Adobe Express エンタープライズでコンテンツを作成する際のデータフローを説明したものです。この説明の各ステップは、下図の番号に対応しています。

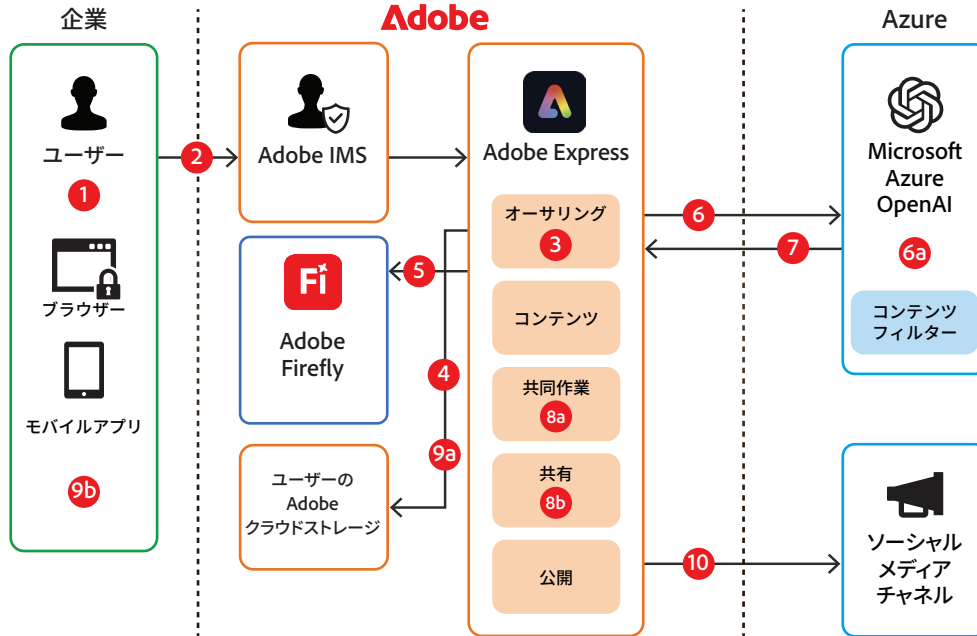


図 1： Adobe Express エンタープライズ版におけるコンテンツ作成のデータフロー

データフローの説明

ステップ 1：ユーザーは、express.adobe.com にアクセスするか、Creative Cloud デスクトップから Adobe Express を開き、資格情報を使用してログインします。

ステップ 2：Express はユーザーの ID 情報を Adobe ID 管理サービス (IMS) に送信し、ユーザーが Adobe Express にアクセスする権限を持っているかどうかを検証します。

ステップ 3：認証が完了すると、ユーザーは Express のオーサリングワークスペースで目的のコンテンツを作成します。ユーザーは次の場所からアセットを含めることができます。

- ユーザーに割り当てられた Creative Cloud クラウドストレージ
- Express に含まれるコンテンツライブラリ
- Creative Cloud ライブラリ
- Adobe Express がサポートする統合コンテンツ管理システムおよびストレージシステムに保存されたエンタープライズ管理アセット (組織の Adobe 管理者が Admin Console で権限を付与している場合)

ステップ 4：ユーザーのコンテンツは、編集がおこなわれるたびにユーザーの Adobe クラウドストレージに自動保存されます。Adobe クラウドストレージとセキュリティについて詳しくは、[アドビの法人向けストレージ](#)を参照してください。

ステップ 5: ユーザーは、Adobe Firefly を使用して画像を生成したい場合、Express のユーザーインターフェイスで生成したい画像を説明するテキストプロンプトを入力し、必要に応じて参照画像をアップロードします。Express はテキストプロンプトと参照画像（使用されている場合）を Adobe Firefly に送信し、その後 Firefly が画像を生成して Express 内のユーザーに返します。ユーザーが画像に満足すれば、データフローは次のステップへ進みます。満足できない場合は、満足する画像が得られるまでこのステップが繰り返されます。

ステップ 6: ユーザーは、Azure OpenAI による AI テキスト生成を使用する機能を実行します（テキストからテンプレート生成、プレゼンテーション生成など）。これらの機能への入力には、ユーザーが入力したテキストプロンプトや、ユーザーのコンテンツから抽出されたテキストが含まれる場合があります。これらのテキストは処理のために Azure OpenAI に送信されます（詳しくは、「コンテンツの処理と保存場所」のセクションを参照してください）。

注意：テンプレート／プレゼンテーション生成に使用される画像を含め、画像は Azure OpenAI では生成されません。

ステップ 6a: 生成されたテキストが Express に返される前に、Azure OpenAI のコンテンツフィルターが応答をチェックし、潜在的に不適切または有害な内容が含まれていないかを確認します（詳しくは、「コンテンツフィルタリング」セクションを参照してください）。

ステップ 7: Azure OpenAI は生成されたテキストを Adobe Express に返します。Express はさらにそのテキストを確認し、[Adobe 生成 AI ユーザーガイドライン](#)に違反していないかをチェックします。生成されたテキストは、選択されたテキストの上に表示されるフロート書き換えメニューから使用できます。ユーザーは、元のテキストを置き換えるか、生成されたテキストをテキストボックスに挿入または追加することができます。

ステップ 8: ユーザーは、Express のアセットに満足した場合、次のことができます。

- **8a. 共同作業:** 他のユーザーを招待してドキュメントを共同編集する。Express はアセットのアクセス権限を更新し、共同作業者にメールやアプリ内通知でリンクを送信します。
- **8b. 共有:** 編集／表示／コメント権限を持つ他のユーザーとアセットを共有し、コンテンツを編集せずにフィードバックを提供できるようにする。

Express は、表示、コメント、編集などの権限設定を備えた、アドビがホストする共有リンクを通じてアクセスを管理します。編集、レビュー、修正は、作成者が完成と判断するか、レビュー担当者から必要なフィードバックがすべて提供されるまで繰り返しおこなわれます。

ステップ 9: この時点で、ユーザーは次のことができます。

- **9a. コンテンツを Express エンタープライズ版に保存する**（ユーザーの Adobe クラウドストレージに保存する）。
- **9b. コンテンツをダウンロードする。** ドキュメントの場合は PDF 形式、画像の場合は JPEG、PNG、GIF、ビデオの場合は MP4、プレゼンテーションの場合は PPTX として書き出すことで、ノートパソコン、デスクトップ、またはモバイルデバイスにダウンロードできます。

ステップ 10: ユーザーは、組織で有効になっているオプションを使用して、コンテンツを書き出したり、共有することができます。Express では、接続されたソーシャルメディアアカウントにコンテンツを公開したり（有効な場合）、書き出したアセット（PNG、JPG、MP4、PDF など）を Google Drive、OneDrive、Dropbox、Vimeo、Issuu などの保存先に保存したり、アドビがホストする閲覧専用リンクを生成したりできます。これらの保存オプションでは、書き出されたフラット化ファイルのみがアップロードされ、元の Express ドキュメントはアップロードされません。閲覧専用リンクでは、アドビがホストするページ上でデザインが表示され、HTML、CSS、JSON などの内部データはユーザーに公開されません。

Adobe Express と Azure OpenAI

次のデータは、1つ以上のテキスト生成アクションのために Azure OpenAI に送信される場合があります。

- 望ましい結果（目的、オーディエンス、日時など）について説明する、ユーザーのテキストプロンプト
- キャンバス上の既存のテキスト（ユーザーのデザイン内に存在するテキスト）
- ユーザーが入力として提供したコンテンツ（例：PDF ファイル）からのテキスト
- 生成をガイドするためにユーザーインターフェイスを通じて選択されたオプション（例：スタイルや出力タイプ）

アドビは、Microsoft がアドビのお客様のデータにアクセスしたり、Azure OpenAI のトレーニングに使用したりできないようにするために、Azure OpenAI の不正使用監視サービスを無効にしています（Caption Writer 機能を除く）。アドビは Azure OpenAI でのログ記録も無効にしており、Azure OpenAI に処理のために送信されたデータを Microsoft が収集、確認、保存しないようにしています。[Azure OpenAI のデータプライバシーとセキュリティ](#)に関するページ（英語）を参照してください。

コンテンツのフィルタリング

アドビは、Azure OpenAI のコンテンツフィルタリングサービスを活用して、ヘイト、性的、暴力的、自傷的なコンテンツを調整します。このサービスでは、テキストの文脈的および意味的理解を備えた Microsoft 独自のモデルが使用されており、これらの安全性チェックを通過した場合にのみ、生成された応答がユーザーに返されます。

テスト実施

アドビは、生成 AI 製品における偏った有害な結果の可能性を減らすためにテストを実施しています。アドビの生成 AI ソリューションの開発とテストのプロセスについて詳しくは、[ビジネス向け生成 AI に関するソリューション概要](#)（英語）を参照してください。Adobe Express の年次セキュリティテストレポートについては、[Adobe Express セキュリティテストレポート](#)（英語）（NDA が必要）を参照してください。

データ保持

Adobe Express は、ユーザーのアセットとプロジェクトを Adobe クラウドストレージに保存します。Adobe Express は、Adobe Creative Cloud エンタープライズ版スイートの一部として、Creative Cloud のストレージおよび保持ポリシーに従い、データの保持と削除を管理します。詳しくは、[HelpX](#) を参照してください。

ユーザーがファイルを削除すると、そのファイルはユーザーの削除済みフォルダーに移動され、30 日後に完全に削除されます。アドビは最大 180 日間ドキュメントのバージョン履歴を保持しますが、ユーザーは重要なバージョンをブックマークすることで、それらを手動で削除するまで保持することができます。

Express エンタープライズ版ではコンテンツログが生成されます。これは、アセットの作成、閲覧、更新、共有、削除などのイベントを記録し、ユーザーの ID、IP アドレス、タイムスタンプ、ファイル名、イベントタイプなどをログとして保存するものです。管理者は、Adobe Admin Console を通じて、組織のコンテンツログの過去 90 日間のローリング履歴を確認し、ユーザーがどのようにアセットを利用しているかを把握することができます。コンテンツログの詳細と、管理者によるダウンロードの方法については、[HelpX ページ](#)を参照してください。

アドビは、Adobe Express の維持および改善、ならびに機能利用の傾向把握のために、匿名化された分析データを収集します。分析データは、アドビの[企業プライバシーおよびデータ保持基準](#)に従って保持およびアクセス管理され、文書化されたビジネスニーズを持つ、認可されたアドビ担当者のみがアクセスできます。

コンテンツの処理と保存場所

ユーザー生成コンテンツ

Adobe Trust Center の [Creative Cloud エンタープライズ版のデータセンター](#)（英語）を参照してください。

Azure OpenAIのホスティング場所

Microsoft は、Microsoft Azure データセンターで Azure OpenAI サービスをホストしています。所在地については、[Azure に関する地理的情報](#)のページを参照してください。

ご不明な点がある場合

Adobe Express エンタープライズ版のセキュリティ体制と機能についてご不明な点があれば、アドビのアカウントマネージャーにお問い合わせください。アドビのセキュリティ対策および企業コンプライアンス認証に関しては、[Adobe Trust Center](#) を参照してください。